

研究助成 研究成果報告書（HP掲載用）

研究課題名：保育施設給食の食材サイズは子供の咀嚼支援につながっているのか

山口県立大学 寺田亜希

【研究要旨】（研究要旨を200～300文字程度でご記入ください。）

本研究では、子供への適切な咀嚼支援へとつなげるために、保育施設で提供されている給食の食材サイズに着目し、アンケート調査を実施した。食材サイズが発達段階に対応した大きさとなっているのか、また対応していない場合にはその要因がどこにあるのかを明らかにする。

【研究目的】

乳歯列完成までは咀嚼機能の獲得期と言われ、この時期の適切な咀嚼は子供の健全な発育に必須である。しかし、保育施設における給食の食材サイズは誤飲・窒息予防等の安全面が最優先となることや施設・設備的な問題から、子供の発達段階よりも小さな食材サイズで提供する施設も見受けられる。本研究では、子供の適切な咀嚼支援につなげるため、保育施設において提供される給食の食材サイズを年齢別に調査し、実態把握を行うことを目的とした。また、保育施設での食事提供を取り巻く要因と食材サイズの関連についても調べ、子供の発達段階に対応していない場合の課題を明らかにする。

【研究方法】

保育施設を対象としたアンケート調査を実施した。給食の食材サイズを年齢別に調査し、年齢別の食材サイズへの対応がある施設とない施設の2群において、給食提供環境（施設の種類、給食提供頻度・形態、食数、ミールラウンド）、人員（給食従事者、献立作成者の職種・経験年数）、咀嚼に関する食育について群間比較を行った。

【研究結果】

給食の食材サイズは、2歳児と比較して、3、4、5歳児で差がみられたものの、3、4、5歳児間では差がみられなかった。また、各施設の食材サイズへの対応状況は、2段階と設定している施設が50～60%と最も多く、3段階以上と設定している施設は20%未満であった。

食材サイズへの対応の有無において、給食提供環境、人員、食育との関連に有意差はみられなかった。2～5歳児で同じ食材サイズを提供している理由として、「保育室で保育職員が小さく切る」「誤飲・誤嚥事故防止のため」「サイズを変える必要がない」との回答がそれぞれ20～50%の施設でみられた。

【考察】

食材サイズへの対応の有無において、給食提供環境、人員、食育との関連はみられなかった。2～5歳児で同じ食材サイズを提供している理由からは、誤飲・誤嚥事故防止

のために低学年に合わせて小さい食材サイズを提供している施設がある一方で、保育室で保育職員が個別対応をしているため、高学年に合わせた大きい食材サイズでの提供が可能な施設があることが推察される。また、2ー5 歳児において食材サイズを変える必要がないとする見解も一定数みられ、食材サイズへの対応にはこのような施設の方針が影響していると考えられる。

【結論】

給食の食材サイズは、2 歳児と 3、4、5 歳児の 2 段階での設定されている施設の割合が最も多く、3 段階以上と設定している施設は限られていた。

食材サイズへの対応には、誤飲・誤嚥事故防止の観点に加え、保育職員の個別対応や学年別に食材サイズを変える必要がないとする見解等、施設の方針が影響している可能性がある。